

再びハノイを訪れて

1. はじめに

20年振りにベトナムの首都ハノイを訪れた。

今回は、帝人の前田弁理士、協和の黒瀬弁理士等8名の訪越団が1992年10月に APAA Chiang Mai 理事会の前にハノイを訪れ、ベトナム特許庁、裁判所、商工会議所等を訪問した。前回来た時には飛行場の芝生で牛が草を食べていたのには驚かされたが、今回、成田からの直行便ベトナム航空 VN311 で到着した NOI BAI 国際空港は小柄ながら近代的な国際空港に衣替えしていた。しかし、飛行場の一隅にある土管を半分に切ったドーム状の待避場の中には戦闘機らしき飛行機が格納されていた。

直行便はエアバス A330、こじんまりしているが中々軽快な飛行機である。今回はソ連製の旅客機、勢いよく席に座ると座席が後ろに倒れたまま元に戻らなかった。スチュワーデスもにこりともせず水やスナックを配ってくれた。ティパックがあったのでお湯を要求するとただ無いとだけ答え取り付く島もなかったが、今回は、真っ赤なアオザイを着用したふっくらとした丸顔のベトナム美人のスチュワーデスが満面の笑顔でサービスしてくれた。

今回のハノイ訪問は、アジア弁理士会 (APAA) の62回理事会に出席するため、2013年10月18日から22日までハノイ市の国際コンベンションセンター (NCC) で行われた。会議後は数名でカンボジアのアンコールワットの観光旅行をしてきた。

会議の内容や報告に関しては役員の方にお任せして、私は、20年前に比べて変貌したハノイの町の状況や会議や観光によって得られた面白い経験や印象についてお話ししたい。

2. 躍進するハノイ市

前に訪れた時のハノイは、紅河 (ソン

コイ河) 沿いの現在の旧市街のみであった。ホアンキエム湖を中心に両側に街路樹を植えた横道の多いまるで中国の古い地方の町のような静かな町であった。その裏道にはフランス時代の面影を残した洒落れたレストランなどもあった。



20年前のハノイ市内ピアノレストラン



20年前のハノイ市街

今回会議のあった NCC のある新開地は旧市街の幅の5倍ほど西、車で20分ほど隔てたところにある。20年間で街全体がここまで膨張してきた。昔は旧市街を一步外に出ると森と原野のみで人家はなく、夜になると全く灯のない真っ暗な地帯であった。ハノイの北側にタイ湖 (西湖) という大きな湖がある。前回の宿はこの湖の畔にあるキューバの援助によって建てられた当時としては一番立派な Tang Loi ホテルに泊まった。客部屋は一部屋ごとに湖の中へ突き出て建てられたコテージであった。夜になりホテルの敷地から一步外に出ると真っ暗でとても一人歩きできない状態であった。しかし、その地帯もすっかり開発され、道路は縦横に整備され商店や立派なホテルが

建ち並んでいる。



20年前の Tang Loi ホテル

ハノイは遷都1000年を記念する電飾で飾られた竜の横断幕が主要道路の至る所で見られる。11世紀、李王朝の李太祖がハノイを都と定め1010年に遷都した。ハロン湾はハ(降りる)ロン(竜)の意味で、昔、シナからの侵入者を竜の親子が現われ口から宝玉を吐き出して退治したと伝えられているので、ベトナムでは竜はありがたいものとしてあがめられている。ハノイ市内は遷都1000年のため市内至る所で工事が行われている。また、郊外も道路、橋梁、下水道などインフラ工事が進められているのが目立った。



2年前に新設された APAA 会場の NCC

今回私の泊まったホテルは、NCCのすぐ側に聳え立つ Landmark72 という72階建てのビルの中にある Calidas Keangnam ホテル、外観は超近代的なホテルにも拘わらず、ビジネスホテル形式で、水のペットボトル2本と石けん1個の他は、歯ブラシ、シャンプー類、寝間着、お茶パック、ホームバー等一切のサービス用品は置いてなかった。しかし、自炊ができるように、炊事用の流し台、電子レンジ、電子コンロ、湯沸かし器、冷蔵庫等は設置されていた。



**Calidas
Keangnam
ホテル**

しかし、58階の私の部屋から見たハノイ新開地の景色は大小の高層ビルの間カラフルな住宅が建ち並び、大きな道路にはバイクの群れがまさに真っ黒なアリの行列のように移動していた。



**ホテル 58階のホテルの窓から
見たハノイ新開地**

3. 交通事情

ハノイ市内の主要な交通手段は路線バス、タクシー、セーオムといわれるバイクタクシーである。昔は路面電車が走っていたが1989年に廃止されても未だに街には線路が残されている。市民の足としては圧倒的にバイクが多い、20年前に来たときもバイクが多かった。今は自動車も結構増えてきたが、バイクの数は半端ではない。しかも殆どのバイクは2人乗りである。休日になると、ダウンタウンは二人乗りの若者のバイクであふれる。80%は彼女を乗せたバイクである。彼らはどこに行くのかと現地の人に聞いてみると、町中を走り回っているだけだという。しかし、日本の暴走族と違って、ゆっくり静かに走っているので、あまり迷惑にはならない。後ろに乗った

彼女は男性の腰にしがみついているものもいるが、大部分の人は膝に手を置いて座っている。ミニスカートで横座りになって座っている女の子さえいる。それほど安全運転をしている。大きな交差点を除いては信号が無いので、人々はその合間を縫ってゆっくり歩いて横断する。



数十台のバイクが束になって走る

旅行者の交通手段はタクシーだけだ。バイクタクシーもあるが、二人乗りのバイクの後ろに乗せられるもので、旧市内に行ったとき、何回か客引きされたがさすが私も怖くて乗れなかった。

バイクの殆どはホンダ、たまにはヤマハで125CCクラスの小型車である。現地の人に聞いてみると国産車だと言っている。なぜならば、ホンダもヤマハも現地生産しているからだ。しかし若い女性は少し高いがイタリア車（Piaggio Fly）を欲しがるとのこと。

4. 住宅事情

ハノイは急激な都市開発のため住宅事情は最悪とのこと。大部分の住民は旧市街の昔の古い家に住んでいるが、独立したり外から移住してきた人は賃貸住宅を見つけるのが大変だ。ベトナム人は日本人と同様に持家意識が強く一軒家を持ちたがるが、市内の独立家屋は一般市民の手が出る代物ではない。郊外に間口1.5間位の細長ののっぽの新しい家屋がたくさん建っている。そもそもベトナムでは土地の所有は認められていないが、中国と同様に国の土地を借りる権利は認めら

れている。税金は間口の広さに応じて課税されるので、最低限の間口の土地を借り、そこに家を建てている。しかも、ベトナムでは金利が高く実質的にローンは組めないで、親が一生掛かって貯めた金でやっと家が建てられるという状態である。殆どの家が煉瓦建て、塗装費を節約するため屋根と表面だけがペンキで美しく塗装されている。



間口の狭いのっぽビル

5. ハロン湾

エクスカーションの一日、朝5時半APAAのメンバーを満載したバスが数台ハロン湾に向け出発した。ハロン湾はハノイの東方約140km、車で約4時間の距離、トンキン湾のハイフォンの近くにある。石灰岩台地が海に沈降し、風化された大小3000の小島が点在する風光明媚な海の観光地で1994年世界遺産に登録された。

紅河を渡って郊外に出ると高速道路の沿道には、キャノンや東芝などの沢山の日系企業の工場が目立つ。更に東に進むと田園地帯で刈り入れ前の稲の水田が続く、所々に村落があり真新しいひよろ長い住宅が点在する。先にも述べたように税金の関係で間口が狭く背の高い一軒家である。また、この地方は良質の粘土が取れるので煉瓦工場や陶器工場がたくさんある。また、ベトナムは地震がないので、煉瓦をただ四角に積み上げ表面に漆喰を塗っただけで、正面の壁だけにカラフルなペンキを塗って美しく飾る。



ハロン湾への街道筋のキャノンの工場

また、この地方は大理石の産地らしく沿道には仏像、ヴィーナス、ソウ等の大きな大理石の彫刻を路上に並べて販売している店が点々と続く。途中、トイレ休憩を大理石の彫刻を販売している土産物店で一服して11時近く、ハロン湾に到着。3階建ての観光船に乗り込み、湾内をクルージング。果物を載せたおばさんの小舟が近づいてきて、果物の押し売り。面白いので私の好きなランブータンを注文すると長い柄の網に7~8個の実を入れて観光船の縁まで差し伸べる。実を手にとって2ドルの紙幣を網の中に入れて商談成立。どこの国でも商魂逞しい人がいるものだ。船内でランチを食べたが、さすが港町であるので、エビの甘辛煮や蟹のグラタンなど海鮮料理は美味しかった。鍾乳洞のある島に上陸する。意外に大きな鍾乳洞でアップダウンがきつかったので中を一周しただけで足がぐくぐくになった。



ハロン湾をクルージング



果物売りのおばさん



鍾乳洞のある島へ上陸

6. 水上人形劇

20年前に来たときも水上人形劇を見た。その時は National Water Puppets Theatre と呼ばれ国営であった。プールの中で長い柄の付いた人形を操り、子供が大きな魚を釣ったり、船に乗った人が魚を追いまわすなど、簡単なストーリーなので、意味が分からなくとも結構楽しめるものである。お囃子は笛、鐘、太鼓、三味線のような弦楽器で、そのメロディは丁度日本の村祭りのようで、案外日本の音楽の原点はここにあるような気がした。ところが、子供が大きな魚を釣り上げたクライマックスになった途端、電気がパッと消えた。暗転して電気が付くものと暫く待っていても一向に電気が付かない。そのうち見物人がゾロゾロ帰り始めた。近くの人に聞いてみると停電だそうだ。ベトナムの人はおとなしい人が多く何も文句を言わずに帰っていった。これは20年前の話である。

そんなことがあったので、もう一度見
たくなり、会議の合間を抜けてタクシー
でホアンキエム湖の畔の人形劇場に來
た。流石国营の字は消えていたが、20年
前に比べると劇場の入り口は美しく装飾
されていた。



水上人形劇の切符



水上人形劇の舞台・左がお囃子メンバー

中に入ると舞台は20年前と全く同
じ。舞台の左手に10人ほどお囃子部隊
がいる。人形劇の内容もほぼ似たよう
なものであったが、猿が木に登るとい
う手の込んだものも取り入れられて
いた。

7. 韓国企業の進出

私の泊まった Calidas KEANGNAM
Hotel は韓国のロッテ系のホテルなの
で、調度品はすべて韓国製、エレベーター
は極端に遅かった。テレビはサムスン
の大型テレビ、画面は大きいチャンネル
の切り替え等同期が遅く、使い勝手は
余りよくない。昨年、シンガポールに
行った時もサムスンのテレビ、やはり
チャンネルの切替えがうまくいかなか
った。

デジカメのバッテリーがあがってしま
ったので、繁華街にあるソニーのサー
ビスセンターまでタクシーで買いに行
った。ところが、在庫がないので、Pico という

電化製品の量販店を紹介してもらった。
在庫が1個だけあったが不良品で使い物
にならず、結局充電器を買って手持ちの
バッテリーに充電してもらった。待って
いる間店内を見て回ると、スマホ、テレビ、
冷蔵庫、洗濯機すべて部屋の中央はサム
スンやLGが占め、東芝、三菱、NECな
どの製品は部屋の隅に置かれていた。

バスも殆ど Hyundai が占めている。
なぜ、ベトナムでは韓国製品が強いのか、
現地の人に聞いてみた。韓国のセールスマ
ンのノルマは尋常でなく、自殺率も最
高であるそうだ。

市場で見える限り日本企業でがんばっ
ているのはホンダとTOTO位である。

8. ベトナム人

ベトナム人は概しておとなしい人が多
いようだ。土産物店に行っても押しつ
けるようなことは余りしない。店の軒先
や路上に椅子を10数個並べただけの喫
茶店？が非常に多い。そこで、朝から車
座になってのんびりお茶を飲んでいる
光景をよく見かける。



ハノイ市内 朝からお茶を飲む若者
左の陳列品は靴。靴屋を兼ねている

また、先にも述べたように日本人との
共通点も多い。先ず、稲作文化、食生活
もよく似ている。だしの元は又クマム
といって鰯から作った魚醬でちょうど煮
干しから作っただしと同じ風味がする。
従って、代表的なベトナムの麺、フォー
は又クマムで作っただし汁に米の粉から
作った細めの麺を入れた温麺で日本人
の味覚に合う。

植木の仕立て方も日本とそっくりである。会場 NCC の玄関にあった鉢植えは日本の段作りと呼ばれる形をしていた。



日本のマキの鉢植にそっくりな植木鉢

ベトナムは漢字圏に入る。過去に中国に何度も侵略され、属国になった時代も長い。ベトナム人の名前は明らかに漢字に由来している。私の30年来の友人に Dang Thuy という女性がいる。Dang が姓で Thuy が名である。日本と同じ配列である。一般名詞の単語の中には漢字由来の単語がたくさんある。しかし、彼等に名前の基になる漢字を聞いて見ると大部分の人は知らないと答えるが、お寺などの名前は漢字で縦書きに書かれているのに。

ベトナム人はあまり個性を好まないようだ。バイクはメーカーが異なってもすべて黒、形も殆ど同じ、排気量は125cc。新築の家は先ほど述べたように、間口1間半ののっぽビル、形も同じ、色も同じ。しかし、団結心は強いそうだ。米国を打ち負かしたのもその団結心によるところが多いと思われる。

教育には熱心な様である。村で優秀な子供が出ると村中で応援して外国に留学させる。米国での留學生の優等生は昔は日本人であったが、最近ではベトナム人にその座を奪われたと聞く。

9. おわりに

ベトナムは社会主義国でありながら、1986年ドイモイ政策を導入し、その後段階的に経済自由化が促進され、現在は、本格的な市場経済体制に移行しつつ

ある段階といえよう。日本との貿易も米国、中国について第3位。ベトナムに進出している日本企業は現在710社に及ぶ。ベトナム人と日本人とは似た点が多いので、その利点を生かして、今後の発展を期待したい。今回のハノイ訪問で、東南アジアの入り口に位置するベトナムと日本との関係はますます重要になるであろうことを再認識した。

ハノイAPAA会議の後、会員数名と共にカンボジアのアンコールワット観光旅行を行ったが、紙面の関係で次回に紹介したい。(2013. 11. 3)



はやぶさ国際特許事務所
代表弁理士 川島 順